

農村の保育園の記録④

磯部景子

前回は「藤の木」に関する写真をお送りしましたが、今回は「子どもたちと動物」として、保育園の先生からうかがった「からすのカーヤ」のおはなしと、もぐらのもぐちゃん」の記録をお送りいたします。

子どもたちと動物

(1) からすのカーヤ

「からすのカーヤ」は、保育園の先生が「とても、おもしろかったですよ」と、いかにも楽しそうに話して下さった、五月から六月にかけての、かなり長期間にわたる保育園のできごとである。

五月のある日、町の東方の小山で山火事があった。消防団員（町の住民によって消防団が結成されている）の活躍で三時間後に鎮火した。その日



の夕方、保育園の子どもたちがみんな帰ったところ、保育園の子ども親で消防団員である人から、保育園に電話があった。

「山火事の現場で、からすの巣がみつかって、からすの雛がいますが、もし、保育園でお飼いなさるようでしたら、これから持ってまいります」

今までも、子どもたちが拾ってきた雀の子や、保育園のすぐ近くを流れている小川から、ことごと、と、入ってきた亀などを飼

ったことはあるが、からすの雛を飼うのは、はじめてのことである。三人の先生は興味と不安の入りまじった気持で、からすの到着を待った。

二羽のからすの雛は、小さなダンボールの箱に入れられて、間もなく保育園に到着した。先生方はおそろるおそろる箱のふたをあけてみた。からすの雛は、体中が口かと思われるほど大きな口をあけて「あー」と鳴いた。口の中は無気味なほど真赤で、のどの奥の方まで見えたように思われた。からすの雛はまだ毛がはえていない。何を食べるのだろうか？

先生と消防団の人は、からすを見ながら話をはずませる。ともかく、まず、からすの小屋を作りましょう、ということになって、倉庫から材料が運び出されて、小屋つくりにとりかかる。プラスチックの波板の屋根で、三方が金網の一立方メートルくらいのかからす小屋ができ上がる。小屋は藤の木の近くに置かれた。床にわらを敷いて、からすを小屋に移す。水をスプーンですくって飲ませてみると、からすの雛は何回か飲んだ。

あたりが暗くなつてから、先生は懐中電燈を持って、そつとからすのようすを見に行く。からすの雛は、体をよせあつて首をうずめて寝ていた。

翌朝、先生は牛乳をスプーンで飲ませたり、パンをほんの少

し、小さくちぎって、牛乳に浸して飲ませてみる。からすはたくさん飲んだ。

からすの雛の好物が何であるか、わからないが、先生はからすを育てられそうな気持になって、子どもたちが登園するのを待った。

子どもたちが、朝、園に来てみると、園庭の藤の木の近くに新しい家ができているのが見つかった。中に何かいる。

「わー、なにかおるよ、せんせい。」

「なーに？せんせい。」

などと、保育園中大きわぎになる。

先生は、前日の夕方のできごとを子どもたちに話す。子どもた

ちは、先生から、小屋の中にいるのがからすの雛であることをききおわると、小屋の方へ走って行く。

「からすのあかちゃんがおるよ。」

「なに？からすのあかちゃん？」

「はー、こい、こい、こい、こい。」

などといって、子どもたちはからすの小屋の金網に顔をおしつけて、からすをみつめる。次々に登園する子どもたちで、小屋のまわりは押すな押すな黒山になる。からすの小屋を囲んで、雀や鶏や、亀や、犬や、猫のはなしなどもとび出してきて、活発に会

話がかわされる。

からすはだんだんと大きくなって、牛乳にパンを浸したものの、みそ汁、うどん、煮干など何でも食べるようになった。先生はからすがとても大食家であるのに驚く。

小屋のまわりには、時々何人かの子どもたちが集まってきては、小屋の中のからすを見ていた。

ある日、子どもたちは、からすが怪我をしているのを見つけからすが怪我をした！という大ニュースが、保育園中に広がって、また、からすの小屋のまわりは黒山の人になる。先生はからすのようすをみながら、からすが飛べるようになっていて、金網につかかって、怪我をしたのかもしれないと子どもたちに話す。先生は、からすを小屋から出した方がよいのだろうかと判断する。先生は小屋の戸をあけた。からすがどこに飛んで行くのか、先生にも子どもたちにもわからなかった。

からすは小屋を出て、庭を歩きはじめた。ちょっと、飛び上がることはあるが、まだ遠くまで飛べなかった。子どもたちは、からすのあとについて歩いた。子どもたちは金網ごしにみていた時よりも、もっとからすと親しくなっていた。

からすは子どもたちの中にどんどん入っていく。からすは、ど

こからともなく子どもたちに近づいて、子どもたちの足などをつつく。先生の足もつつく。からすにつつかれると、おとなでもびっくりするし、痛いと感じる。先生や子どもたちが、庭のあちらこちらで遊んでいる中を、からすも同じように、あちら、こちらと遊びまわる日が続いて、不思議なことや、おもしろいことが、次々とおこった。

五月も中ばすぎて、四月に入園した子どもたちも、大部分の子どもは、保育園の生活に慣れてきたように思われてきたころのことである。四月に入園した年中児の男児Tは、そのころになっても、先生のそばにいる時や、ひとりで遊んでいる時は、楽しそうにようすをしていたが、だれか、他の子どもが近づくと、不機嫌になるし、他の子どもが、Tのつかっていたシャベルをつかうと、「シャベルをとったー」と泣き出す。

ある日、Tがつかっていたシャベルをからすが口にくわえて、歩きはじめた。Tはにこにこ笑ってみている。そして、「からすがシャベルを口にくわえたよ」とうれしそうに先生に報告する。からすにつつかれても、つつかせたままにして、みていて、笑っている。

先生はTのようすをみていて、不思議に思った。他の子どもを

警戒しているTが、どうして、からすに対して警戒心をおこさないのだろう。他の子どもが近づくと泣き出すTが、からすにつつかれても喜んでるのは、どういうことなのだろう。

毎朝、給食のおばさんが、家から、からすに食べさせる煮干を持って保育園に来る。からすは藤の木に止まっている。おばさんは「かーや」とからすを呼びながら、保育園に入ってくる。からすはおばさんの声をきくと、普段はつぼめているはねを、うれしそうにぱたぱたとひろげて、おばさんが近づいてくるのを待つ。子どもたちも集まってきて、からすが煮干を食べるのを楽しそうに見る。

ある日、年長児の女兒Aは、赤や黄色や緑色の花模様スカートをはいて登園した。五、六人の子どもたちが集まってお母さんごっこをはじめた。子どもたちが庭にすわっていっしょうけんめいになって、「いい粉」を集めて、お団子をつくっていると、からすがやってきて、Aのスカートをあちこちつつく。（「いい粉」ごみや、小石などのまじったあらい土を手ではらいのけた後に、掌で、地面をはたいて集めた、きめのこまかい土のこと）

「かーや、ケーキをつくってあげるね」Aは、はじめのうちはか

からすにやさしく話しかけていたが、何回もスカートをつつかれたり、何回もスカートをひっぱられて、とうとう、「からすがスカートをひっぱる」と悲鳴をあげはじめた。いっしょに遊んでいた子どもたちは、からすがAのスカートをつつくようすをみていて、「Aちゃん、あかいはなだけつくよ。からすは、あかいものをたべるんだよ」といった。まわりにいる子どもたちは前よりも、もっと注意深く見つめて、「やっぱり、からすは、あかいものがすきなんよ」と結論を出した。子どもたちは、「かーや、あした、あかいもの、たくさん、もってきてあげるよ」とからすに話しかけた。

翌日、子どもたちは手に手にゆすらなどの赤い実をたくさん持って保育園に来る。からすに食べさせると、からすは、あれよ、あれよという間にたいらげてしまった。子どもたちは、からすがとても大食家であるという大発見をした。

足洗い場はいつも水が溢れている。からすは水に潜ったり、出たり、潜ったりする。そのたびごとに子どもたちはからすに声援をおくる。

子どもたちがみんな保育室に入ると、からすも保育室に入る。

子どもたちがおべんとうを食べはじめると、からすも欲しがる。

遊戯室で予防注射が行なわれた時、子どもたちが遊戯室に集まると、からすも遊戯室に入って来て、子どもたちの間をあちこちと歩く。お医者さんが、子どもたちの中にいるからすを見つけて「子どもがひとりふえましたね」と笑う。

からすは、子どもたちが保育園にいる間は、子どもたちといっしょに庭や保育室で遊ぶ。子どもたちがみんな帰ってしまうと、二羽のからすは、それぞれ、保育室の屋根や、近所の家の屋根へ飛び上がる練習をはじめ。

からすは夕暮になると、からすの小屋に帰る。だんだん高くとび上がれるようになると、もう小屋には帰らなくなって、藤の木がねぐらになる。もっと高く飛べるようになってからは、道路をへだてた、西の丘のお寺の境内にある藤の木の何倍かの大きさの、とても大きな木がねぐらになる。この木には夕暮になると、方々から、からすが飛んでくる。

夜があけると、保育園のからすは保育室の屋根におりてくる。からすは先生の姿をみつけると、朝食の催促をする。朝食がすむと、また保育室の屋根に飛び上がる。子どもたちが登園しはじめ

ると、藤の木におりてくる。子どもたちが庭で遊びはじめると、庭におりてきて、子どもたちと遊ぶ。

先生は、からすが食事をするのをみながら、からすのくちばしに、時々、虫をとって食べた形跡があることや、お寺の大きな木をねぐらにするほど成長したことなどを思いうかべて、からすの成長を誇らしく思った。

こうして、毎日、先生も、子どもたちも、からすといっしょにすごす日々を楽しんでいた。が、からすの成長とともに困ったことがおこりはじめた。からすが保育園の菜園や、近所の家の庭を荒らしはじめたのである。

先生はからすを飼っておきたいと思ったが、自然の状態にして飼うと、近所の家に迷惑をかけることになる。からすを飼うのに、からすをつないだり、小屋に入れる気持にはなれない。山にはなして大丈夫な時がきたら、山にはなすのがよいだろうと思うようになった。

ある日、からすは、東の小山のふもとから通園している子どもたちといっしょに、山に帰っていった。